

---

# 受験と単語帳の朝

りき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

受験と単語帳の朝

### 【著者名】

Z6292C

つき

### 【あらすじ】

受験を控えたある高校生の、いつもの通学電車での出来事。退屈な勉強だけの毎日が、一つの出会いから少しだけ変わっていく。

## (前書き)

この作品は主人公の性別が決められていません。あなたの好きな設定でお読みください。あなたが男性なら、主人公を男性に。あなたが女性なら、主人公を女性に。もう一人の登場人物を異性にすると、作者の意図する設定になります。

## 「responsibility」

驚いて顔を上げる。

ん？ 今の、誰が言った？

毎日通学で使う電車の中で、初めて見た相手にそう言われた。

「『責任』 大学受験で覚える単語の中で、一番長い単語かもね」「……？」

座席に座つて捲っていた単語帳を覗き込むようにして、その高校生は立っていた。

驚いた顔で見返していると、一度にこりと笑つて、それつきり窓の外を眺めている。

へえ。これが一番長いのか。確かに長い、これ。

そう考へると、これを覚えたら、もう覚えられない単語なんてないような気分になつて、少しだけ嬉しい。

教えてくれてありがとう、と言つべきか悩んだが、なんだかそれもおかしい気がした。

その高校生も、それ以上何も言わなかつたので、気にしないようにして次の単語に目をむけた。

大学受験を数ヶ月後に控えた受験生としては、唯一の致命的な弱みである英語を克服すべく、通学中も惜しまず勉強を続けていた。いつもは眠気との戦いだが、今日は、ちょっとだけ違つた気分で勉強できそうだ。

次の日。

今日は座れなかつたので、車両の最後部で壁を相手に、単語の書き取りをしていた。

スペルミスは、何よりもつたない失点だ、と昨日の塾でも言われたからだ。

揺れる電車の中で、負けずに鉛筆を動かす事に必死で、すっかり昨日のことなど忘れていたところに、その謎の高校生は知らない間に側に居た。

「へえ。受験英語つて、都市名も覚えないといけないの？」  
振り向くまでもなく、すぐ横でノートを見ていた。

さすがに今日は知らん振りも出来ない。

一体どういうつもりなのか、という猜疑心と、单なる興味心。  
しかし、勝つたのは昨日のあの一言のお陰で、勉強がはかどった事実。

実際、「responsibility」は完璧に覚えた。

相手にそんなつもりはないのだろうが、借りを作ったような気分  
だつた。

「えと、アメリカの主要都市だけでも、と思つて……結構出るらし  
いから」

「ふうん、なるほどね」

そう言つて、より近くでノートを見ようと、顔を近づける。

「I'm Philadelphia。日本人がnativeに言う  
ときは、フィラデルフィアって言つても伝わらないの。なんて言  
えば良いと思う?」

なんだか楽しそうに話しているが、さっぱり見当も付かない。

「さあ……。受験にスピーキングは無いし……」

「『古豆腐屋』って言つた方が通じるんだつて」

「古……豆腐屋？ 古豆腐屋、古豆腐屋……へえ、面白い」

「でしょ？」

満員電車の中で大きな声は出せないが、つい笑つてしまつ。

そこに、大きなターミナル駅からの乗客が、一気に乗り込んで来た。  
自然に一人は別々の方向へと押し寄せられていく。

ちらりと目を合わせてすぐ、サラリーマン達の壁に隔たれる。

なんか、面白い。

一人になつてからも、くすっと笑いが漏れてしまつた。

古豆腐屋。へんなの。

そう考へると、おかしな事に、この単語だけは覚えたいたと思つてしまつ。

英語という『科目』に一生懸命取り組んで来たつもりだったが、  
それは正直言え、なんの楽しみも生み出さなかつた。

元々、受験勉強に楽しみなんて付属品はないと思つていたのだから、それでよかつた。

でも、いま勉強しているのは英語といつ『言語』のような気がする。

私たちが、伝えたい、心や気持ちを表す言語。

こうやって覚えると、楽しいんだな。

少しだけ、大の苦手科目『英語』に対する姿勢が変えられそうだ、  
と思ったら、やっぱりなんだか嬉しかつた。

次の日も、その電車に、その高校生は居た。

名前はもちろん、どこの高校に通つているのかも、何年生なのか  
も、お互いの事は何も聞かなかつた。

でも、毎日の電車での数分間の会話で、いつも英語を『勉強』から、『言葉』として見る為のきっかけをくれる。  
樂しかつた。

英語へのわだかまりも徐々になくなり、みるみる塾での成績も上がりで行つた。

これなら希望大学へも、余裕を持つて望めるだらう、といつお墨付きまで頂いた。

あの電車での毎日のお陰だと云ひ事は間違いない。

今日会つたら、お礼を言ひと思つていた。

しかし、いつもの駅に着いたのに、その姿を見つける事はできなかつた。

その日だけではない。

次の日も、その次の日も。

乗る電車を変えたのかな。それとも、何か嫌な事しつやつたのかな……。

結局そのまま。

その日を境に、受験を迎える頃を過ぎても、もつて一度会つ事はなかつた。

なぜ、毎日英語を教えてくれただらう。  
その疑問すら、聞けていないのに。

数ヶ月後。

無事、第一志望の大学に合格し、今日が入学式を終えた初登校日だつた。

まだ友達はいないが、希望と喜びに胸を溢れさせる。

正門をくぐると、早速先輩達のサークル勧誘の声が浴びせられる。

嬉しくも恥ずかしい気持ちで足早に校舎へと歩き進む。

なにやらもみくちゃにされてしまったが、やつと人だかりを抜けられ、一息つく。

「すごいなあ

「That's crazy  
　　ん？」

すぐ横で聞いた声に振り返る。

「ああ！」

「? oh , i t ' s you !」

「この、大学の人だつたの？」

「ああ、うん。というか、新入生だけど。ここに入つたんだ？　すごい偶然！」

「本当だね！」

自然に笑顔が溢れる。

「何学部？」

「日本語学部、日本語学科」

「……え？　日本語？」

「日本人だよ、正真正銘。でも、帰国子女つてやつ。半年前に帰つてきたんだ」

「ああ、そりなんだ。でも、日本語上手……」

あはは、と白い歯を見せた。

「楽しく覚えようと思って、朝から名前も知らない日本人の高校生に声を掛けて、話し相手になつてもらつた甲斐があつたのかな？」

「それつて……？」

見ると、毎日見せてきていた、あの楽しい笑顔を浮かべていた。

日本語をもつと覚えたかつたから、話しをしたかつた。

教えてもらつていた、と思っていたが、実は自分が教えていたということ。

日本語も、もちろん『科田』じゃない。  
英語と同じ『言葉』だから。

きっと、そういう事なんだろう。

「毎日相手してくれて、どうもありがとう。お陰でこの大学入れた  
「そんな、それはこっちの台詞です。どうもありがとう」  
一拍置いて、二人はどちらとも無く笑い出した。  
あの毎日を思い浮かべて、電車ではいつも抑えていた分、今、大  
声で笑い合つた。

まだ、あの時の単語帳は持つている。  
受験をいい思い出にしてくれたこと、感謝してるから。

わり

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6292c/>

---

受験と単語帳の朝

2010年10月8日16時00分発行